

硬膜下血腫患者に関する看護必要度のあり方は適正か  
～硬膜下血腫穿孔洗浄術と開頭術の直接看護時間の比較～

田村 実由記<sup>1)</sup> 塚田 晃裕<sup>1)</sup> 見田野 直子<sup>1)</sup> 三ッ倉 裕子<sup>1)</sup> 高橋 陽子<sup>1)</sup>  
美原 盤<sup>2)</sup>

1)脳血管研究所附属美原記念病院 看護部

2)同 院長

〔はじめに〕28年度診療報酬改定では7:1病棟算定要件として重症度・医療・看護必要度のハードルは高い。硬膜下血腫は認知症を併存することが多く、硬膜下血腫穿孔洗浄術後の患者の看護必要度は高いと感じられるが、制度上、評価はされていない。今回、穿孔術後患者と脳卒中開頭術後の看護必要度の妥当性を評価した。

〔方法〕硬膜下血腫穿孔洗浄術を実施した1例、脳卒中開頭術を実施した2例において、術後第3病日から第7病日までの直接看護時間を調査した。

〔結果〕穿孔術実施例、開頭術実施例の直接看護時間は、それぞれ第3病日248分、305分、第4病日194分、268分、第5病日226分、277分、第6病日233分、312分、第7病日315分、402分であった。

〔結論〕穿孔術実施患者と開頭術実施患者の看護必要度は術後7病日まで明らかな差がなかった。硬膜下血腫穿孔洗浄術実施患者の看護必要度は適切に評価されるべきである。